

シリーズ

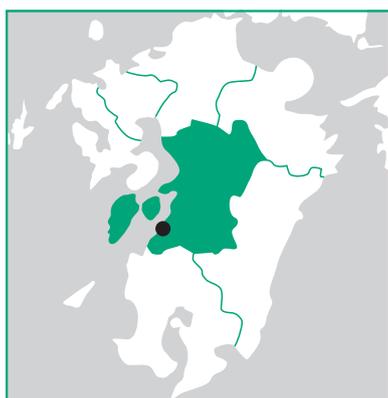
新・漁業人

池田匡孝さん

熊本県 芦北町漁協所属 朱圭丸 船長

趣味の釣りが転じて
45歳で脱サラ、漁師になった
師に学びブランド魚釣りに徹す

所在地 ● 熊本県芦北町
 経営開始年 ● 2021年
 漁業種類 ● タチウオ曳縄漁
 使用船舶 ● FRP (ガラス繊維強化プラスチック) 船4.4t
 従事者数 ● 1人



タチウオは船の上ですばやく選別される(上) 漁に出るのは日の出前だ(下)

ブランドの田浦銀太刀

「漁は楽しい。海に出たらあつと
 いう間に時間が経つ」

熊本県の八代海でタチウオ曳縄ひきなわの漁に勤しむ池田匡孝さん(46歳)の弁だ。

2020年の暮れに熊本県の新規漁業就業者研修(次世代人材投資事業)を修了。21年6月、念願の漁船を手に入れ、独立独歩で漁を始めた。なつて間もない新米漁師だ。

池田さんが狙ってとるのは、GI(地理的表示産品)にも登録されている芦北町漁協のブランド魚「田浦銀太刀」。磨き抜かれた日本刀のように、眩まぼろしいほど鮮やかな銀色に光るタチウオだ。その称号は、厳密なブランド認証基準に沿って、八代海で丁寧な釣り上げ、きめ細かい鮮度保持と品質管理を施したよりすぐりの魚にのみ与えられる。

釣り上げたタチウオは体表を覆う銀箔を剥がさないよう、決して握ってはいけない。暴れるタチウオの鋭い口にかかった釣針を指でつまみ、手首を返して仕掛けを外す。それと同時に、海水氷を張ったクーラーボックスへ素早く魚を漬けて、釣れたての活きの良さを損ね

ないように氷締めする。操業中も常に釣った魚に気を配り、氷が溶けて海水が薄くなったら塩を足して水温、塩分濃度を整える。こうして水揚げする「田浦銀太刀」はキロ級の大物なら一箱(5キロ)5尾入りで1万円以上の高値を呼ぶ。

「田浦銀太刀」の限定漁場の八代海は、入江が連なる海岸線に囲まれた日本有数の閉鎖性海域で、不知火海とも呼ばれる。北は有明海、南は東シナ海に通じ、八代・球磨・国見山地を抜けて流れる一級河川の球磨川から豊富な栄養が注ぎ込む。このような肥沃な漁場であつぷり餌を喰って育つタチウオは「盛漁期は春と秋だが、居付きの魚だから一年中釣れるし、どの季節でもおいしい」と池田さんは胸を張る。

40歳半ばで脱サラして漁師になつた池田さん。妻子ある身で一大決心に踏み切つた動機は「子どもころから釣りが好きだつたから」。趣味が転じて本職の漁師になつたわけだが、志望したのははじめから「網ではなく釣り」。アマチュア時代から経験があつて高く売れるタチウオの曳縄釣りの道を選んだ。しかし、漁に求められる技能も知識もプロとアマでは「まったく違う」。だから、「自分はまだ修行中。



選別されたタチウオはすぐ陸に運ばれる。よく釣れた日は池田さんも自然と笑顔になる

もつと経験を積んで腕を磨かなければ」とあくまでも謙虚な姿勢を崩さない。

そんな池田さんに、田浦漁港のベテラン漁師たちは、長年の経験の末に見いだした漁場や漁法を惜しげなく伝授する。「この先輩方は皆親切で、自分は恵まれていまず」と池田さんはしみじみ言った。

師匠から学ぶ漁師修業

熊本県多良木町で生まれ育った池田さん。地元の中学校を出て初めて故郷を後にして、甲子園出場の名門校、鹿児島実業高校に進学。野球部に入部して白球を追う青春時代を過ごした。卒業後はしばらく鹿児島県内で働いたのちにUTライン。多良木町でサラリーマン生活を十数年続けたあと、福祉関係事業を営む実家を継いだ兄の裕紀さん（48歳）と家業を支えた。だが、好きな釣りを毎日できる漁師への夢が断ち切れなかった。

そんなある日、裕紀さんに「実は漁師になりたいんじゃない」と思い切つて切り出した。返ってきたのは「なら、やってみれ。バックアップしちやるけん。失敗したらまた戻ってきたらよか」。大胆な転職を試みた池田さんの背中を押してくれたの



「師匠」と慕う岩田栄次さん(右)と池田さん

は兄だった。

こうして、2020年3月のある日、意を決して「どうしたら漁師になれるのですか」と熊本県水産研究センターに電話した。すると、熊本県漁業就業支援協議会が実施する次世代人材投資事業に基づく同水研センターによる、曳縄漁業研修コースの道が開かれた。

研修は同年6月12日から始まった。マンツーマンの実習で漁のイロハを教えてくれたのは、今でも敬意を払って「師匠」と呼ぶベテラン漁師の岩田栄次さん(61歳)だ。まず一番の師の教えは「絶対に安全第一ぞ」だった。それから約2年を

経て、晴れて漁師になった池田さんに漁の信条を聞くと「あまり(漁に)集中してはいけない。常に周囲に気を配り、事故を起こさずまわりの人に迷惑をかけずにやることが大切だ」と返ってきた。

タチウオ曳縄漁は浮玉4個を付けた延長500メートルのロープに6メートル程度のハリス(針に近い糸)50〜60本を連ねた仕掛けで、その根本には船上から海に落とすワイヤーと先に分銅をつけた筋糸が結ばれている。仕掛けを海に投入すると、船から降ろしたワイヤーの角度をほぼ45度で保つよう船速約2ノットで約1時間、曳航し続ける。その間、

海底の起伏に合わせて魚がいる深さに調整し、魚が針に食いつくのを待つ。

池田さんの仕掛けは師匠の岩田さんに倣ってハリスの数を53本に決めており、釣り針には冷凍サンマかサバの生餌と擬似餌を半々の割合で取り付けている。投縄は船尾から入れる方法と舷(側面)から落とす「横たぐり」があるが、池田さんは師匠と同じように横から下ろす。

漁師には自由と責任

こうして岩田さんの下で手取り足取りの漁師修業を重ねて半年を経た2020年12月25日、池田さんは晴れて研修を修了。翌21年5月には念願の船を手に入れた。

日本政策金融公庫から融資を受け、それに蓄えてきた貯金を足して購入した4・4トンの中古船で、小学6年生の娘・朱那ちゃんと中学2年生の息子・圭汰くんの名前からそれぞれ一文字ずつとって「朱圭丸」と命名した。

以来、夜明け前に船を出し、陽が昇るころ、沖で仕掛けを入れて漁に取り掛かる日々を送っている。とはいえ、本職に就いて一年足らずの新米漁師の池田さん。不慣れでわか

らないことは師匠の岩田さんをはじめ、ベテラン漁師の教えを仰ぐ。

芦北町漁協に所属する田浦漁港のタチウオ曳縄漁師は約30人いるが、「沖では『わからんことは俺に聞け』とか『俺の後に付いて来い』とか言っただけで好漁場に連れて行ってくれることもある」らしい。

「今は幸せです」。30年近くに及んだサラリーマン生活を振り切つて、念願の漁師になった池田さんは屈託なく話す。

そして、「漁師という職業は力仕事できついとか辛いなどのイメージが、少し誤解されていると思う」と切り出した。実際にタチウオ曳縄漁を体験すると「力もさほど使わず、海の上で独り楽しく魚と向き合っただけでいい」と、釣り好きの池田さんには、まさに願った叶ったりの天与の職業らしい。

何より丁寧に釣って値が張るブランド魚「田浦銀太刀」の漁に徹すれば「暮らしにも困らさずちゃんと家族を養っていける」。だから、漁師は「失敗するのも自分だし、魚をいっぱい釣上げるのも自分次第という、独立独歩のやりがいのある仕事」と言い切った。

(佐々木満／文 河野千年／撮影)